

『動物のおまわりさん』

著：森本あき

ill：明神 翼

「じゃあ、叶羽には本物の動物を近づけなきゃいいんだね」

「うん！」

「わかった。これからずっと、そうする」

あのと看、そう約束したくせに。一緒に暮らすまで、それを守りつづけていたくせに。

どうして、こんなことになってんだよ！

「叶羽？ 聞いている？」

聞いてねえよ！ こっちは子犬を目の前にして、パニックってんだ。子供のころに思いを馳(は)せて、ああ、そうだ、ずっと佑星と歩んできたんだな、とか頭の中をお花畑にしないと、やってられるかっての！

「叶羽？」

「…なんだよ」

「明日、飼い主を探しに行くから、一晩だけ置いていい？」

ダメって言ったら、外に放すのか？ それはないだろ。だったら、答えなんて決まってる。

「…好きにしろよ」

このアパート、ペット禁止なんだぞ！なのに、職業柄、遺失物を預かるのはしょうがない、とか思ってたんだろ。周りも周りで、こいつを甘やかしやがって！アパートのすぐ隣の家に住んでる大家さんまで、松尾さんは特別ですよ、本当は建物が傷むからやめてほしいんですけど、交番にずっと置いておけないのもわかりますからね、なんて、目を細めながら、佑星が連れて帰った犬や猫を撫でてやがる！

おまわりさんだからって無理を言われても困ります、うちはペット禁止なんですからほかの人に預けてください、ぐらい厳しいことを言う大家さんがよかった。そうだったら、さすがの佑星も家に連れて帰ってこないだろうに。

「ありがとう、叶羽！」

明らかに叶羽が不機嫌なのがわかっているくせに、佑星は明るく告げる。髪をくしゃっと撫でられて、叶羽は眉をひそめた。

犬の匂いつけんなよ！

でも、言わない。だって、二度と髪を触ってくれなくなったら困る。

「そのかわり…」

「わかってるって。ちゃんとケージに入れて、家の中をうろつかないようにするから」

佑星は浮かれた足取りで、玄関から入ってすぐ右手にある洋室に入って行った。ちなみに、このアパートは2LDKだ。六畳の洋室と八畳の和室、そして十畳以上は優にあるLDK。トイレ、風呂は別で、最新式のものになっている。アパートだけど造りがしっかりしているのか、隣や上の階の物音もまったく気にならない。二人の実家のある東(とう)京(きょう)なら、これだけの広さと設備なら十万後半の値段になるだろう。

なのに五万円。何度もたしかめたけど、五万円。以前にだれかが死んだ、いわゆる

事故物件じゃないかと調べてみたら、この辺りは二階建ての一軒家でも十万円を切るというから、驚きだ。物価が安くて、すばらしい。

寝室は広いほうがいいだろう、と、八畳の和室に布団を敷いて寝ることにした。畳に布団なんて旅館に泊まりに行くときぐらいしか経験がないから、どうだろうな、と思ってはいたけど、予想以上に心地がいいし、背中も痛くならないし、ベッドよりもぐっすり眠れている気がする。

それに、さすがにこの小さな町では、男同士でダブルベッドなんて買ったら、何を言われるかわかったもんじゃない。だけど、布団なら、いくらでもくつつけられる。

布団、万々歳だ。

洋室のほうは、便利部屋というのだろうか、パソコンを置いたり、机を置いたり、本棚があったり、リビングに入らなかったものを並べている。

その中に、ひとつ、叶羽が見るたびに、捨ててやろうか、と考えてしまうもの。

それが動物用ケージだ。

佑星が連れ帰った動物たちを入れておくためのケージが目に入ると、もう二度と出番がありませんように、と願う。だけど、その願いが叶(かな)うことはない。

たとえば、一週間に一回とかの割合で動物を連れ帰るのなら、文句も言える。

約束がちがう、俺は動物とは一緒に住まないって言ったじゃないか、これなら、別々に暮らしたほうがマシだ。

そうやって憤(いきどお)ることもできる。

なのに、三ヶ月に一度、とか、下(へ)手(た)したら半年あいてふいに、とかだから、叶羽は動物のことなんてすっかり忘れてしまっているし、今回のように見たら即座に固まってしまって、何も言えなくなる。

佑星は叶羽の目に触れないように寝室とは別の部屋に連れて行ってくれるんだし、非番の前の日にしか連れて帰らないし、ケージの横で自分も一緒に寝て、鳴き声がないようにきちんと世話をしているし(それは、ペット禁止のアパートだからほかの住人に気を遣っているのもあるだろう)、叶羽が本気で動物ぎらいなことがわかっているから、起きたらすぐに動物を連れ出してくれる。

たった一晚。それさえ我慢すればいい。

洋室には動物がいない。

そう思い込めば、どうにかやり過ごせるぐらいの時間だ。

だけど、佑星が動物を連れて帰るたびに悲しくなる。

叶羽は動物がきらいなんだよね。だから、ぼくが叶羽を守るよ。ぼく、動物が好きだし、動物もぼくのところにやってくるから、叶羽のほうには絶対に行かせない。怖い思いをさせないよ。

幼いころ、そう言ってくれたはずなのに。

二十歳を過ぎて、世間からも大人だと認められる年齢だというのに、まだ子犬や子猫すら怖いというのは、何かの欠(けつ)陥(かん)があるのだろうか。佑星は、いくら苦手だって言っても、いい年なんだから一晚ぐらい大丈夫だ、と、叶羽を買いかぶっているのだろうか。

俺は、いまでも動物が怖い。子犬でも子猫でも、近寄りたくない。

大人になったら、動物が苦手じゃなくなるんじゃないか。

それは、叶羽自身も思っていた。

子供で、自分の体も小さいから、動物が怖いんじゃないだろうか、と。
そうじゃない。いま、もし、猫が膝の上に乗ってきても、幼いころとおなじように泣きだす自信がある。

大人の分別で、涙も悲鳴もこらえるだろうけど。

心の中では大きな叫び声をあげている。

それを、佑星がわかってくれないとしたら、こんなに寂しいことはない。

「叶羽」

ひよい、と洋室から、佑星が顔を出した。

「何？」

言葉がとげとげしいのぐらい許してほしい。だって、まだ立ち直れていない。

「怖い思いさせて、ごめんね。できるだけ、家には連れて帰らないようにしてるんだけど、今日は飼い主が見つからなくて。でも、起きたらすぐに探すから。ホント、ごめんね」

神妙な表情の佑星を見ていたら、怒りが、すうっと引いた。

なんだ、ちゃんとわかってくれてるんだ。

それが伝われば、こんなにも心が軽くなる。

「メシ食う？」

ぶっきらぼうな口調は直らないけど、叶羽からも歩み寄ってみよう。こんなことで冷戦状態になりたくない。

「食べる！」

笑顔になった佑星を、やっぱり好きだ、と思った。

佑星が動物好きで、動物に弱くて、たまに叶羽を困らせても。

それでも、この人が好き。

本文 p26～32 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>